



尼崎市

お問合せ先

尼崎市 シティプロモーション推進部 シティプロモーション事業担当

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6793

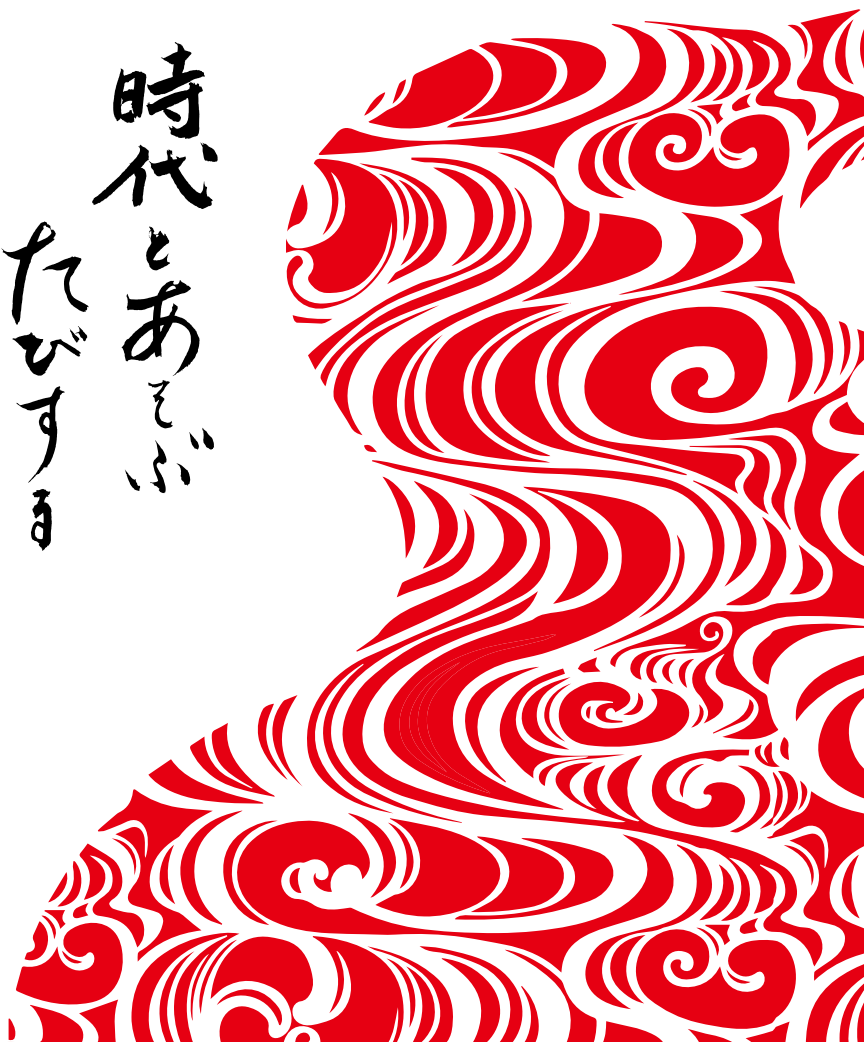
E-mail : amalove.a.lab@gmail.com

archive
vol.17

A-Lab Exhibition Vol.15

山本 太郎展

時代とあそぶ
たひす
つくる



あまらぶアートラボ A-Lab Exhibition Vol.15

尼崎城プロジェクト関連企画

時代とあそぶ たびする つくる

山本太郎展

■目次

出展作品	03
トークショー「時代とあそぶ 地域をくすぐる」	15
作品探検ツアー	26
フライヤー・会場配布資料	27

A-Lab ☒ Exhibition Vol.15
山本太郎展





山本 太郎（やまもと たろう）

1974 年熊本生まれ。2000 年京都造形芸術大学卒業。京都造形芸術大学准教授。

1999 年に日本画ならぬ「ニッポン画」を提唱。日本の古典絵画と現代の風俗が融合した絵画を描き始める。近年は企業等と積極的にコミッションワークを行いキャラクターを使用した作品も多数制作している。その作風は現代の琳派とも評される。2015 年京都府文化賞奨励賞受賞



《アケオメリクリ 山本太郎の紅白の階段》 カッティングシート / サイズ可変 / 2018

Project 1 アケオメリクリ

階段、廊下

2017年12月から2018年1月にかけて、秋田公立美術大学サテライトギャラリー・ビヨンポイントを、クリスマスとお正月の象徴である紅白の空間に変えたプロジェクト、アケオメリクリ。その壁面のデザインには、尾形光琳の国宝「紅白梅図屏風」を現代的にリミックスした山本の作品「清涼飲料水紋図」が用いられました。今回、そのプロジェクトをA-Lab仕様に作り変え展示します。また、ビヨンポイントでは展覧会会期中にクリスマスパーティーを開催しました。作品を舞台に秋田舞妓が舞うなど、その時の模様を映像で紹介します。



左：《清涼飲料水紋図 Red & White》紙本着色金彩 / 53 × 33.3cm / 2018
右：《清涼飲料水紋図 Strawberry Moca》紙本金地着色 / 33.3 × 24.2cm / 2018

万国旗ゾーン

廊下



左：《つきのわぐまパンダカー》紙本金地着色 / 33.3 × 53cm / 2017
右：《万国旗 楯図》紙本金地着色 / 24.2 × 33.3cm / 2011



Project 2 熊本ものがたりの屏風

room1

2016年の熊本地震で被災した襖表具材料店から、捨てられることになっていた屏風などを山本が譲り受けて修復し、そこに公募で集められた熊本に住む人々の思い出の品々を描いたプロジェクトです。



左から順に：《熊本ものがたりの屏風 みんなの思い出腰高屏風》 紙本金地着色 / 各 117.5 × 90cm、二曲一隻、三対 / 2017
 《熊本ものがたりの屏風 いと小さきもの小屏風》 紙本金砂子着色 / 36.5 × 91cm、二曲一隻 / 2017
 《熊本ものがたりの屏風 女性のハレの日金屏風》 紙本金地着色 / 168 × 186cm、三曲一隻 / 2017
 《誰ヶ袖図屏風 模ホノルル本》 紙本金地着色 / 152.2 × 365.2cm、六曲一隻 / 2016



《山本太郎图案 芸艸堂制作 マリオ & ルイージ図木版画》©Nintendo 山本太郎 2015
木版画 /66 × 30cm(絵寸)/2015

Project 3 コラボレーションプロジェクト

倉庫

山本と手摺木版和装本出版社の芸艸堂、ゲームメーカーの任天堂、男のきものえいたろう屋や陶芸家、宮川真一氏とコラボレーションして生み出した木版画や浴衣、茶碗などを展示します。



《アイコン柄浴衣》注染 / 男性用浴衣 / 2012

《ワラ灰釉 玩具の絵茶碗》13.2 × 6.7cm/2011/ 個人蔵
《ワラ灰釉 富士に新幹線図茶碗》11.2 × 8.8cm/2014/ 個人蔵

■「時代とあそび たびする つくる」山本太郎展





《八木沢番楽幔幕》木綿 染色 / およそ 530 × 190cm / 制作年不明

上小阿仁村八木沢地区公民館蔵

《平成版八木沢番楽幔幕》ポリエステル布にプリント / およそ 530 × 190cm / 2017

上小阿仁村八木沢地区公民館蔵



Project**4** 平成版八木沢番楽幔幕 (かみこあにプロジェクト 2017)

room3

マタギの里として知られる秋田県上小阿仁村。ここで 2012 年から始まった芸術祭「KAMIKOANI プロジェクト秋田」(2016 年より「かみこあにプロジェクト」と改題)に初年度から参加している山本が、2017 年に限界集落である八木沢地区に伝わる郷土芸能「八木沢番楽」のための新しい幔幕を制作しました。それまで使われていた幕と新しい幕、そして新しい幕のために描かれた原画を展示します。





Project 5 羽衣バルーン (KAMIKOANI プロジェクト秋田 2014) 和室

能楽の「羽衣」のクライマックスで、天女が自分の羽衣を返してもらい天人の国に浮遊しながら帰るシーンを風船で表現した「羽衣バルーン」屏風。その屏風のまわりに、たくさんの本物の風船を置いています。観客のみなさんは、その中に入って風船で遊んだり、そこから風船をひとつだけ持って帰ることができます。その代わりとして、その場で新しい風船を作って補充していただくなど、作品と観客が双方向的に関わることを目指したプロジェクトです。

トークショー「時代とあそぶ 地域をくすぐる」



藤本さんのこと

山本太郎（以下 山本） 藤本さんのことを知らない人も多いので、まずは自己紹介をお願いします。

藤本智士（以下 藤本） 編集者というのが自分の肩書で、本や雑誌を作るのが基本的な仕事です。大体出版社が東京にあるので、同業者はみんな東京に行っちゃうんですけど、僕はずっと関西にいます。その方が、勝ち目があるなと思っていて。

山本 それは若い時からですか？

藤本 そうです。ずっと思っていました。東京に行くっていう欲望がなくて。それよりも地方と地方が繋がっていく時代みたいなものが僕のビジョンとしてはあったので、大阪や兵庫にいながら、長野の仕事をする、福岡の仕事をする、秋田の仕事をするみたいな、もはや東京をすっとばして、地方と地方が繋がって盛り上がっていくみたいな世界がきっとくるだろうというのをなんとなく思っていました。

「編集」というフィールドは、圧倒的にメディア、出版社とかが東京に集中しすぎているんですけど、

東京の大きいメディアを介してしか全国に発信できないっていう時代じゃなくなるっていうのを僕は感じていました。10年前、15年前だって、すでに皆ブログとか言い出してるわけで。

山本 そうか。時代感覚が追いつかないけど、15年前って、ブログが出始めてるんですね。

藤本 そう。気づいたらね。そういう時代になっているから。

山本 それは藤本さんが編集やっていたからすばやく感じ取ったっていうのはあるのでしょうか。普通の人はそこまで感じてなかったかもしれないし。スマホでこんなに繋がる時代になるっていうのをあの時予見している人は少なかったですね。

藤本 予見していたというより、疑問に思ってたんです。情報発信していくとか、何かを伝えるっていう時に、東京の出版社だけが全国に発信するんですね。出版社だけでなく、テレビ局もですけど。「東京のメディアだけが全国発信して、他の地方のメディアはなんで全国に発信しないのか」というすごいシンプルな疑問。したらええやんっていう。関西で言うと、Meets とか Lmagazine*1

とか地域情報誌みたいなことで、その地域のなかで経済を動かしていくってことで終わっちゃうんですよね。でも実は、「どこからだって全国の皆さんにお届けしてもいい」って僕はずっと思っていたので、今もそういう意味では秋田とか熊本もそうだし、兵庫に住みながらずっと編集者をやっているというのは、そういうことができる時代になってきたんだなと思います。

二人の出会い

山本 お互いに、京都と兵庫を拠点に活動していたんですけど、知り合ったのが秋田なんですよ。秋田で出会ってしまった。

藤本 太郎ちゃんはいつから秋田で先生していたの？

山本 5年前なので、2013年で、秋田に行き出したのは2012年とかなんですよ。*2

藤本 僕は「のんびり」*3っていう秋田県庁の発行物があって、その編集長を2012年から2016年までの4年間やってたんですよ。これ自体は4年で終えて、今は秋田県発行の「なんも大学」というwebマガジンになっています。その編集長を今も務めているので、僕はいまだに秋田に月1、2回は行ってるんですね。僕も2012年くらいに「のんびり」きっかけで、秋田に行くようになり、太郎ちゃんも美大の教員になって。最初は、「のんびり」の取材で、日本酒の純米酒の特集をしたときに美大のみなさんにお世話になったのがきっかけですね。

熊本とそれぞれの関わり

藤本 同い年で感覚的に近いところがあるので、余計に仲良くなったっていうのがあるんですけど、熊本に関しては震災のことがなければ太郎ちゃんが熊本出身だっていうことを知らなかったです。京都の人っていうイメージで、ずっと関西の人だ

とと思ってたから。

山本 そういうイメージで売り出してますからね(笑)。

藤本 僕も秋田に限らず日本中色々な地域を回って、記事を書いたりっていうのが仕事なので、色々な地域に友達がいっぱいいて、東北の震災の時もそうだったけど、どこにしようと、友達がいたら心配じゃないですか。「大丈夫かな？」っていう。それで、熊本もなにか出来ないかなって思っていました。震災を機にお客さんが減ったりっていうことが絶対あるから、自分なりにガイドブックみたいなものをつくれればいいなと思い、なんのあてもなく、一回熊本に行って、友達に案内してもらったりとかして、実情を色々みて、やっぱり大変なんやっていうのを肌で感じました。帰ってきて、本を作ろうと思っていたところにたまたまアミューズっていうお世話になってる東京の芸能事務所の方から連絡があったんです。俳優の佐藤健くんが自分で企画した熊本の本を作りたいと思っているので編集してもらえないかっていう話で。

山本 そこでリンクしたんですね。

藤本 ちょうど、僕が行った話をしたら、それじゃあっていう話になって。取材先とかをアテンドして編集して。

山本 健くんが熊本を巡りながらっていう本ですよ。いわゆるガイドブックに載っている観光地



藤本智士さん

だけでなく、色んな場所が載ってましたもんね。*4

藤本 僕、その前身で「ニッポンの嵐」っていうジャニーズの嵐のメンバーと一緒に全国回った本を作ってそれを色んな芸能事務所の人たちがみてくれていて。当時、いわゆるタレント本じゃなくて、ガチでドキュメンタリー性のある本ってなかったというか。僕「のんびり」でも、もともと作ってた「Re:S」*5でもそうなんですけど、あんまり決めないんです。台割っていうのを書かなくて、行き当たりばったりで、アポも取らないんです。ガチで行って、ドキュメンタリー的に拾ってくるっていうことをいつもするんですけど、さすがに嵐や健くんて100%はできないけど、ある程度は現場で決めるっていうことをやっていきました。そういう意味ではとても温度の高い本ができたと思います。

山本 あれば熊本の人めっちゃ喜んでと思いますよ。

藤本 売上を熊本の復興支援にって言うてののに、熊本の人がたくさん買ってくれたんです。

山本 自分たちでお金を落として、自分たちの復興支援をするという。それもいい感じですけどね。打ち合わせの時にどなたかと話していて、「アートはいいですね早くになにかができるからね」って言うてもらったんですけど、僕は全然それとは違う感覚で。絵を描くとか、ものを作る方のアーティストって、全然スピード感がないなっていう感じだったんですよ。なにか災害が起こった時に、歌う方のアーティストさんって、すぐ現地入りしたりして、歌うたってみたりとか、復興支援のコンサートとかかわりと早めにできちゃうじゃないですか。でも絵描きって、ものが出来上がらないとなんにも動けないから、それこそ手持ちにあるもので展覧会やってその収益を復興支援にとかっていうのは何度かやりましたが、それに直に関連

した事を伝えるっていうのはすごい時間がかかるので、なにができるのかなっていうことを悶々と考えている時間が長かったんです。でも熊本は出身地だし、なにかしたいっていう思いだけはずっとあって。そしたらたまたま高校時代の一個上の先輩が、地元で建築士をやっていて、その人は古いお家とかを保存するというのをたくさんやっている人だったので、ここ(room1)に並んでいる屏風を扱っている、熊本で一番老舗の表具とかの材料屋さんで知り合いでした。そこは建物自体が古いけど、直したら費用が莫大にかかるからそれは無理だということで、更地にしちゃうという話になってて。

藤本 それはもうご商売をやめちゃうということでは？

山本 そうなんです。代がちょうど代わったばかりで、女性の方が細々とやっていました。先代の方が表具屋みたいなこともやっていて、材料を売ってだけでなく、自分で掛け軸もされるような方だったんだけど、その先代もご病気されてて、結局地震のすぐ直後に亡くなられるんです。そういう経緯もあるし、廃業をして建物も無くすと。その時にこういう屏風も、捨てるにしてもお金がかかるので、建物を壊す時に一緒に全部廃棄してしまうということで、この辺に並んでいる屏風は捨てられる予定だったんですよ。さすがにそれは忍びないというのがあって、引き取ることになり、そこからスタートしてるんです。引き取ったもののいくつかは本当にボロボロで。屏風って形状的に本と一緒になので、意外と内側は大丈夫なんです。でも閉じられている外側は、ビリビリに破られていたりして。この屏風も3面じゃないですか。屏風って本当は偶数が増えていくんですよ。2、4、6、8とかありますけど、これは3じゃないですか。本当は4面あったんですよ。4つ目は間を紙で細工してつなげてあったんです。こ

のつなぎ方にプロの技があったりするんですけど、そこがもうビリビリに破れて取れてたんですよ。それならば直す時に4つめを新たにつなぐよりも、3面で屏風にしちゃったほうが、震災というかそういうものの記憶としての屏風だよっていうのをちゃんと残せるんじゃないかと思って、この形式にしました。

藤本 アートは時間がかかるって言うんだけど、時間をかけることでアーカイブされるじゃないですか。そこにすごい意味があるし、屏風の中に皆さんの思い出を、記憶を残すというのは、ある種、写真みたいやなって思います。東北の震災の時に、津波が大変だったので、泥だらけの写真を洗って乾かして持ち主に返すっていうのが自然発生的に各地であって。それを2年間くらい取材し続けていました。その時に、写真って、ひとつわかりやすかったのは、泥だらけのアルバムとか写真とか、各土地ごとの体育館に集められるんですね。そこでボランティアをしている人たちがひたすら洗浄して乾かしていくんだけど、そうすると、いっぱい泥だらけのアルバムとかが並んでるわけ。それは小さなポケットアルバムから、しっかりしたものの卒業アルバムから、額に入った写真から、色んなものがあるんだけど、その時にはっきりしたのが、ここ10年の写真がそこにはほぼ無かったんです。デジタルになってから皆プリントしていないっていうことが露呈してたんです。皆データの方が残るとか、サーバーにアップしておけば津波にあわないみたいなこと言うんだけど、あれは死んじゃったらパスワードもなんもわからへんから、無いに等しいんです。持ち主に返すっていう動きの時もそうなんですけど、「あ！これ誰誰さん写ってるやん！」とかって言って持って行ってあげるみたいな感じで、“物”としてある強さがすごくて、だからこそ震災直後に、その写真を見たくない人っていうのもたくさんいました。だか



《熊本ものがたりの屏風 女性のハレの日金屏風》

らそれは善し悪しだったんだけど、きっと10年、20年たって、自分が生きてきた証っていうのが欲しいなっていうときにそれがあるっていうのはすごい大事だと思って。そういうのを見たときに、写真が持っている力、アーカイブが持っている力っていう物としての力とかがあっていうのをすごく痛感しました。この1枚の1つの作品の中にも何人かの人の思い出がつまっていたりするわけじゃないですか。

山本 そうですね。そこがやっぱり人間の人間たる所以で、生活基盤は、時間が経っていけば、家建て直すとか、ライフラインつくるとか出来ると言うんですけど、人ってそれだけで生きてるわけじゃないから。

藤本 自分が生きてきた証がなにかしら残るってことってというのは生きていくうえですごい大事なななって思って。本当にこういう風に、ひとつのモチーフがそこに残されるっていうだけなんだけれどもそれだけじゃないっていうか。きっとその人たちが前を向いて生きていけるっていうことにこの作品の意味があると思うので。

山本 熊本の話で言うと、さっき言ったみたいな、経緯で譲っていただいた屏風なので、その上に自

分の自己表現をするのは違うなと思ったんですよ。熊本の人たちで当然地震にあって、さっきの写真じゃないけど、持っていたものが無くなっちゃたりとか、壊れちゃったりしているものを持って人たちもいるだろうなっていうのもあったし、震災だけでなく、色んなものって、やっぱり思い入れを持って毎日使ったりするよなっていうのを思い出して、じゃあそういう熊本の人たちの思い出を描く屏風にしたらいいんじゃないかっていう発想になりました。そもそも熊本で展覧会やることは決まっていたので、熊本市にある島田美術館さんに協力していただいて、屏風に描く思い出の品を広く公募をして、集まったものを描かせてもらったんです。すごく面白かったのが、アーティストって、自分が描きたいものがあるから描くじゃないですか。普段は。でもこの屏風って、僕が描きたいものって一個も無いんですよ。そういう作品って、まああんまりないですよ。言ってしまう。それって例えば、クライアントさんがいて、マリオ描いてくださいとかポケモン描いてくださいっていうのともまた意味合いが違うし。描いているときはすごい不思議な感覚でした。

藤本 最近、利他の欲望みたいなことをインタビューで喋ったことがあるんだけど。自分のやりたいことじゃなくて、誰かが喜ぶことに対して、自分がなにかをやるっていう。人が喜ぶ姿が見た



山本太郎さん

いという思いは綺麗事じゃなくて、欲望としてあるんだってことを思っていて。以前、宇宙物理学者の佐治 晴夫さんっていう方の講演を聞きに行って、動物って色々いるけど、大体お腹の中で結構成長して出てきますよね、でも人間の赤ちゃんだけは、すごい未熟なまま出てくるから、絶対親が手をかけてあげないと死んじゃうと。だから人間だけは、何かをしてあげるっていうことに喜びを感じるようになっていくんだという話をしていて。なにかをしてあげるとかっていうことが綺麗事じゃなくて、喜びであり欲望でありっていう。

山本 もうプログラムされてるかもしれないと。

藤本 みたいな話をされてて、僕はそうだなとすごい思ってる。だからこれは太郎ちゃんが描きたかったモチーフではないかもしれないけど、太郎ちゃんがやりたかったことだし、描きたかった作品なんだろうなっていう風に思います。

ニッポン画の残す未来

藤本 太郎ちゃんの特徴は、日本画っていう独特の技法だったりとか、守るべきところはキープしなきゃっていうのが当然あって、それでなきゃ日本画じゃないっていうところがある中で、シンプルに現代的なモチーフが入ってくるっていう、その面白みだと思うんですけど。僕は、太郎ちゃんの作品を見ていつも、落語家の桂文枝さんのことを思い出します。文枝さんって新作の創作落語をめちゃくちゃ発表する人じゃないですか。前にインタビューで「古典もみんな新作だった」と言うてはったんです。僕は太郎ちゃんの作品をそういうことだと思って見てるんです。これが単純な現代的なモチーフを持って「面白いでしょ？」っていう風に皆はみてるだけかもしれないけど、太郎ちゃんは多分こういうものをもって将来の古典をつくろうとしているんだってことを思います。

山本 それはあえて言っていただくとありがたい

ですね。スタートの段階は割とそうなんですよね。おこがましいですけど、文枝さんのその視線にちょっと近くて。っていうのは学生時代に、たまたま能っていう芸能を習わせてもらって。京都造形芸術大学っていう今勤めに行っているところで、学生時代過ごしていました。ちょっと変わった大学だから、観世榮夫先生っていう、もうお亡くなりになったんですけど、そういう能楽師の先生を呼んできて、授業もやるし、部活動の面倒も見てくれてたんですけど、この観世先生がとにかくはちゃめちゃん人でした。能楽業界から長らく離れてた時期があって、舞台やったりとか、映画やったりとか、役者業をたくさんやられて、能楽師に復帰されてからもその感覚のまま、新作をつくったりとか、っていうのをすごくやられてた方なんですよね。それをみて「そうか、600年くらい前のやり方で、新作作れるんや」というのは思ってたんです。同時に最近一緒にお仕事させてもらうことも多くなった、茂山家っていう狂言のお家が京都にあるんですけど、そこも本当にはちゃめちゃんお家で、なんでもやるんです。それこそ、落語家さんとのコラボとかもたくさんやっています。その茂山家の同世代の宗彦くんっていう子も京都造形に通って、僕は熊本出身だから、大学入って知り合うんだけど、彼のことは知らないじゃないですか。ちょっとイケメンなお兄ちゃんが、能楽部でやたらとうまいわけですよ。プロだから（笑）。それで、ライブのチケットを渡すかのように、公演のチケットをくれて。それを見に行ったら、新作をばんばんやって。「こういうことできるんや」というのは思いましたね。そこからの発想も結構あるので、ありがたいですね。そういう風に受け取ってもらえるのは。

藤本 太郎ちゃん作品って、とすれば、マリオやスターウォーズが描かれているものもあるから、アーティスト界のちょっとポップな役割みた

いな感じもありますよね。

山本 完全にね、アーティスト業界の芸人キャラっていう感じもね。

藤本 それはそれでめっちゃめっちゃ大事な役割だと思うんですけどね。でもそこだけでとる人も多いですよ。

山本 そうですね。だから今回正直 A-Lab さんっていう場所を使わせてもらって、こういうと失礼ですけども、例えば公立の美術館みたいに、たくさん人が来るとか、アートフェア東京みたいに、たくさん作品が売れるみたいな場所じゃないわけですよね。そういう所でこういう展覧会をやらせてもらう時に、なにやろうかなと思って。もちろんこの展覧会にマリオも出てますが、正直秋田でやってたプロジェクトとか、熊本のやつとか地味だから、「売れるのか？」と聞かれても「他人の思い出欲しい人がどれだけいるのかな」みたいな話とかになるわけで。そういう場所で出来ないようなことをいっぺんにここでやっちゃおうかなと。意外とそういう仕事も秋田に行ってから特に地域と関わることも多くなっているけど、よく考えたら関西の人に知ってもらってないよなっていうのがあって。こういう機会があって、本当にこの展覧会は僕にとってすごくうれしい展覧会ですね。

藤本 そういう意味では、不思議な場所ではあるけど、それはそれで必然を感じるというか。元・公民館っていうところは、色々あるから、ひとつの事例としては中々先進的な感じじゃないですか？

山本 面白いですよ。本当にこういう場所をね、どんどん使えるようになったら面白いのになと思って。僕がちょっと自分の中で少し不満があるとしたら、ホワイトキューブ*6 っぽく使ってるところがあるので、もう少しこの建物の地の部分をね、活かせる展示にしたらもっと良かったかなとは思いつつ。

藤本 まあでも難しいよね。白壁はやっぱり安心

感あるよね。

山本 白壁はね、普通にやれば展示っぽくなりま
すからね。みなさん気づいてないかもしれないで
すけど、後ろの扉っぽいところ開けると、全面鏡
張りなんですよ。公民館時代におばちゃんたちが
ダンスしたりとか、小さい子がバレエの練習した
りとかにも使えるようなスペースとしてここは本
当は機能していたんですよ。だから一個一個の
お部屋に部屋の機能としてこういう部屋ですよ、っ
ていう記憶があるんですよ。この建物には。美
術館は逆にそういう記憶を消して、展示のためだ
けにつくられた真っ白なスペースで、無味無臭で
すよみたいなスペースで。

藤本 本来はそうじゃないのに、ホワイトキュー
ブ的な使い方をしているから、ちょっとどうかなっ
ていうね。

山本 今回はそれしかやりようがなかったんです
けど。

藤本 実際は難しいですもんね。それこそプロジェ
クトになるしね。

山本 もっと練りこんでいけばできたかなって思
います。誰か若い人でもっと挑戦的な人がやって
くれたらいいんですけどね。

地域プロジェクトとアーカイブの力

山本 藤本さんも地域のことやってるんですけど、
僕はアーティストとして熊本のことだけではなく、
なにができるかなっていうのを秋田行ってから特
に色々考えるようになって、ひとつはさっきちらっ
と出てきましたけど、アーカイブ機能っていうの
があるじゃないですか。写真もそうだけど、普通
にみたら日本画というか、作品っていうような捉
え方をする人が多いんですけど、別の面で見ると、
アーカイブができるメディアっていう風な切り口
でもみれるよなって最近思っているんですよ。
例えば何百年も前の屏風が残ってて、パッと開け

ると、かしこい人たちは文献読めばその当時のこ
とがよくわかるけど、古典の文献をそのまま全部
読める人なんて今では少ないわけで。逆に屏風を
パッと開くと、その時代のことがなんとなく雰囲気
として伝わる、記録されているっていう意味で
はメディアとも言えるわけで。しかもさっきのデ
ジカメの写真は、意外と残っていないっていう話
と一緒に、今のデジタルデータのメディアって時
代によって変わってくるから「せっかくCDに焼
いてたのにこれ開かれへんやん」っていうことが
今から普通になってきて、CD自体ももう古いメ
ディアみたいになってくるんですけど、屏風は古
すぎるから逆に開けるだけでいきなり見れるとい
う誰でもアクセスできちゃうっていう良さがあり
ますよね。

藤本 巻物とか屏風とかってそうですよね。

山本 だからこれが100年越しに誰かが取っ
ておいてくれて開けた時に、なんで熊のぬいぐるみ
が描かれてるかわからないけど、「なんか大切な
ものだから屏風に描いたんやろうな」ってことだ
けは残っていくことになるのかな、ということは
ちょっとあって。それがアーティストとしてでき
ることのひとつだなんていうのを最近感じている
んですよ。だから上小阿仁プロジェクト*7の幕
を作ったやつがあるじゃないですか。あれも皆さ
ん想像しにくいと思うんですけど、そもそも秋田
県は日本の中で高齢者率ナンバーワン、人口減少
ナンバーワン、自殺率ナンバーワンくらいの、ワー
ストが結構多いっていう。その中でも上小阿仁村
はさらに過疎が進んでいる村なんです。

藤本 そもそも村がもうあまりないからね。

山本 人口が2000人くらいなんですよ。なお
かつ上小阿仁プロジェクトのメインの会場の八木
沢集落っていうのが、10人住んでいないんじゃない
かなくらいの。集落としては。年齢も平均年
齢が70,80代だから。ってことは10年後どう

なってんの？みたいなことを考えた時に、集落自体が無い可能性があるんですね。だけど、あそこでやられていた番楽*8っていう郷土芸能があるんですけども、八木沢番楽っていう名前なんです。っていうことは八木沢番楽が受け継がれていけば、八木沢集落に誰も人が住まなくなったとしても、上小阿仁村の人たちがこれが八木沢番楽だっていって、練習している限りは、八木沢の記憶は残っていくんだろうなっていうのがあったんですね。名前は八木沢番楽なんだから。若い人がなんで八木沢番楽？八木沢ってどこやったっけ？ってなった時に、そういえば上小阿仁村に八木沢っていう集落があって、あそこに人が住んでいたんやなっていうのが引っ張り出されるのかなっていうのがあって。そういう風に本当になくなっていくようなものに対して、なにかちょっとアプローチしたいっていうのがあって、新しい幕を作ろうかなっていう発想になりました。

藤本 番楽っていうのは山岳信仰で、鳥海山だったり、八木沢っていうところも最後のマタギの人がいたりとか、そういうところなので、信仰的なところもあって、神に奉納することも含めて番楽っていう伝統が残っていて、その背景は皆布に描かれているんだよね。すごいおっきいな織みたいなやつで、それが八木沢に限らず秋田県内のいろんなところで残ってるんだけど、八木沢はほんまにいいよもうね、無くなっちゃうっていう感じになっていて。

山本 ただ、一応、八木沢番楽自体は上小阿仁村の小中学校の授業の中に取り入れられたので、これまた面白くて。おじいちゃん世代か、小中学生しかできないんですよ。間の40代50代の一番やらなあかん人たちが「俺らみたことあるけど出来ないもん」みたいな感じなんですよ。でもようやく途切れそうだった糸が繋がれつつあります。上小阿仁プロジェクトっていうものはじめた芝

山昌也さんっていう方が、当初から「これアートプロジェクトじゃないからね」ってずっと言っておられて。アートに限定しちゃうと、番楽とか扱えないじゃんみたいなのがあって。最初からアートの展示もやりながら、初年度とかね、番楽サミットみたいなものやって、各地の番楽を呼び寄せて、講演会やったりとか、披露があったりとか、その流れが今も郷土芸能披露みたいなコーナーで残ってたりするので、そういう意味でも地域にとって、アートが地域活性化になってほしいとか言われているのでやらされるというか、期待はされるんだけど、絵一枚置いたくらいで、人口増えへんし、出生率があがらへんし、そういうことはできないんだけど、そうじゃなくてそもそも地域にあった大切なものを大切なんだなって地域の人が自覚するようなことのお手伝いが少しできるのかなっていうように思ってた。藤本さんはまさしくそういうことを先々遇もやってきたばかりですよ。秋田で。

藤本 「いちじくいち」ね。その話の前にひとつ前提としての話をすると、池田修三*9さんっていう木版画家が2004年に82歳で亡くなってるんですよ。当然僕もお会いしたことないんだけど、秋田県にかほ市っていう一番県南のところ出身の人で、その人の木版画の作品がめちゃめちゃ良いんです。その作品に出会ったのは、「のんびり」をや



山本太郎さん



藤本智士さん

る前で。秋田には毎年のように行って、友達もいて、その友達の家に飾ってあったのが最初の出会いでした。女の子のモチーフが多くて。可愛いんですけど、みんな目にうっすら影があるんですよ。最初はかわいいと思ってたんですけど、よくみるとなんか深刻な表情に見えてきて、その陰りとその奥の強さを僕はイコール秋田っぽいなと思ったんです、関西人として。秋田は日照時間が日本一少ないんですよ。

山本 生物的にも心理的にもしんどくなりますよね。

藤本 そういうのも絶対あるし。めちゃめちゃいいところなんですけどめちゃめちゃ雪深いから寄せても寄せても雪が降ってくるっていうあの不毛なやつは本当にしんどくなるやろうなっていう。だから「いいところだけど辛いよね。」っていうのも全部ひっくるめて、その作品の中に、それを越えた強さみたいなものが全部入ってると思ったから秋田っぽいなと思って、聞いてみたら確か、秋田県にかほ市出身の池田修三って人やと思うってその友達が教えてくれて。そこから周りの秋田の友達に色々聞いてみたらですよ。「池田修三って知ってる？」って。そしたら誰一人知らなかったんです。それでも作品の写真を見せたら、家にあるとか言い出すんですよ。

山本 秋田の人はみんなね、各家に1枚くらいは

ある。名前は知らないけど見たことはある。

藤本 本当に。一番面白かったのが、新築とか結婚とかのお祝いによくあげたりもらったりしたとかね。僕が20代の頃にアートイベントを関西でやってた時って、「なんでみんなアーティストの作品買ってくれへんのやろ？」っていうのが一番にあったんです。友達の作品を皆が買ってくれたらいいのっていう。なのにですよ、買ったりあげたり、もらったりしたみたいなのが当たり前におこなわれていて。「僕が10年以上前に求めてたやつをすでにやっている人たちがいたんや！」みたいな。で、池田修三さんの故郷にかほの町に降り立ったんですよ。でも当初は池田修三のいの字もなんにもなくて、観光パンフレットみたいなものにも載ってない。そこで、一軒お店に入って聞いてみたら、奥から絵を出してこられて。お店ではなく家に飾ってるんですよ。表に出すもんじゃないくらいあたりまえに浸透してたってことなんです。それはすごいと思って、「のんびり」で取り上げました。行きにくいところなんだけどはじめでその地元で展覧会をやったら、「のんびり」でしか告知してないのに、2500人来たんですよ。長崎や横浜のような遠いところからも。で、その2年後には生前にもかなわなかった秋田県立美術館での展覧会をやったら、9日間で1万2千人とか。そのご草間弥生さんや篠山紀信さんの展覧会をやろうと、最大動員を抜かれてないんです。それくらいめっちゃ再ブレイクして、池田修三っていう人のことを介して僕は秋田県にかほ市に足しげく通うようになりました。風光明媚ですごくいいところで、ご飯もすごく美味しくてっていうところなんですけど、僕は正直アートっていうので頭打ちになるっていうのを編集者の、プロデューサー的でいやらしいかもしれないんだけど、考えていました。やっぱりアート人口って少ないっていう感じが僕ははっきりとあったんで。今、駅前に行っ

たら「池田修三の町へようこそ」って、秋田空港でも「池田修三の故郷」って書いてあって。そういうことをできるのが編集の力なので、それは僕はすごいやりがいはあるんだけど、でもその一方で、これではかほの町に来てほしいっていうには限りがあるから、やっぱり“食”でなにかやりたいなっていう思いがありました。池田修三もいいけど、にかほっていう町は北限のいちじくって言われるいちじくの産地でもあるので、それをベースにした「いちじくいち」っていうイベントをやりました。これもまた廃校になった学校が会場で、車でないと絶対来れません。でも鳥海山がみえてきれいでいいとこやしていいので、とりあえずそこにして何とか1000人集めようと思って、頑張ってみて、ふた開けたら5000人来たんですよ。2キロ先まで渋滞になって。田んぼのまわりとかにみんな平気で車停めるから警察にもめっちゃ怒られて。そういうことを続けていて、つい二週間前に3年目のいちじくいちがあったんですけど。またすごい人出で。そういうふうには地域を盛り上げていくみたいなことって、簡単にみんな割とアートっていうけど、やっぱりそれに対しては懐疑的というか。

アートの力・役割

山本 僕はそれでいいと思っていて。アートは微力ですよやっぱり。越後妻有とか、直島*10みたいな成功例があっちゃうから、みんなアートだったら地域活性化するって思いこんでるけど、正直そこまでの力はないよ、本当に。

藤本 難しいところで、アートに力があると思っ
てはいるんですよ。もちろん。すごいそこを信じているけれども、アートってなんだろうっていうのが、僕は今の皆が無思考にパツと思うのはファインアートの世界だけじゃないんじゃないですか
っていうのを思っていて。僕は最高のアーティ

ストはビートルズだっていうのがあるんです。アートの最大の爆発力って、革新的であって大衆性があるっていう両方兼ね備えていることだと思うんですよ。革新性があるだけじゃ人々は理解しないし、だけど大衆に迎合するだけでももちろん駄目で、ここの2つが両立しているのって、多分ビートルズぐらいしかいないんじゃないかってすごく思っていて。革新的なのに大衆性があるっていうのをキープできるものっていうのはそうそう出てくるもじゃないと思うんです。でもそれって僕はすごくアートだと思うし、すごくそれがアーティストックだと思っている。そういう意味のアートっていうもので僕は自分なりにやっていきたいって思っているから、世間一般の思うアートと自分のものとはズレてるなっていうのはすごく思ったりします。

山本 僕も力がないって言ったんですけど、役割が違うと思っていて。さっきも言ったみたいにこの屏風が数百年残るとか、っていうのは、この一瞬に関しては、すごく弱いエネルギーかもしれないけど、それがずっと持続しますよみたいなこともある一方でアートの力だし。とか思うと、やっぱりでも地域の行政が求める活性化って、そういうのじゃなくて、もうちょっと爆発力じゃないですか。そういうのって本当にアートが持ち得る場合もあるけれど、全部が全部のアートが持っているわけじゃないから、それこそ編集の力とか、藤本さんのような人とか、あるいはアートの業界でいうと、キュレーションとか、ディレクションをするような人たちと一緒にやらないと、アートが本来持っている力っていうのは引き出せて来ないので、ただアーティストがいてその人の作品を廃校になった小学校に置けば地域活性化するかっていわれたらそうじゃないですよ。その辺の勘違いは世の中的にちょっと起こっているなと思っています。古いものと新しいものをどうミックスさ

せていくのかっていう部分で、藤本さんだって地域のことやってるから、全てそれに関わっている秋田なり、熊本でもいいけれど、全部新しいものに置き換わっていくことが是ではなくて、そういう新しいテクノロジーは活かしていくんだけど、その地域ごとにずっと育まれてきた生活みたいなものは大切にできるようなそのバランスがうまく取れるような世の中になっていくといいですよ。

藤本 日本画っていうものが継続していくためにはチェンジし続けなれないといけないとか。明治のチョコレートのロゴが微妙にずっと変わり続けているのと一緒に、常にすごくスタンダードなものとか皆が思いこんでるものは実は全部微妙に時代に合わせて変化しているものなんです。だからこそ今も続いている。だから日本画の世界だって所謂、ザ日本画っていうものを、これを守るんですけどっていう伝統芸能、伝統工芸になっていくと、やっぱり無くなっていく。そこにチェンジしていく人、新しい風を吹き込ませようとする人がいると、その世界っていうのは伝統として繋がっていくから、そこを勘違いしている世の中の風潮っていうのはあるんじゃないかなとは思うんだよね。

山本 そろそろ時間で、ここは尼崎の施設なので、尼崎市的にまとめると、今度新しくできる尼崎城もそういう風に伝統を活かして、元々はお城っていう伝統的な建物だったはずのところを皆が集えるようなスペースにする予定なんですね。見るだけのお城にしないんですって。中に入ってわいわい遊べるような場所にしたいっていつてんでそういう風に今と昔が繋がっていくといいですよ。

***1 Meets/Lmagazine** 2冊とも京阪神エルマガジン社が発行している地域の情報誌。Lmagazineは2009年2月で紙媒体の発刊を休刊した。

***2 秋田公立美術大学** 2013年に秋田市に開学した美術大学。2013年から2018年まで山本太郎氏はアーツ＆ルーツ専攻

で准教授を務めた。

***3 のんびり** 2012年から2016年まで発行された秋田県からニッポンのびじょんを考えるフリーマガジン。藤本智士氏が編集長を務めた。それまで取り上げられなかった秋田の魅力を掘り起こし秋田以外でも多くの反響があった。

***4 「るるうにほん 熊本へ」** 2017年発行 佐藤健著
俳優の佐藤健氏が熊本各地を旅しながら守るべき日本の伝統文化とその未来について考える書籍。売り上げの一部が熊本の地元自治体に寄付される。藤本智士氏が編集を行った。

***5 「Re:S」** 2006年から2009年まで発行された季刊誌。タイトル名は「Re:Standard あたらしい“ふつう”を提案する」をコンセプトに付けられたもの。藤本智士氏が編集長を務めた。現在紙媒体は休刊中。

***6 ホワイトキューブ** 「白い立方体」という意味で現在多くの美術館やギャラリーなどが取り入れている白い壁で囲われた展示空間の総称。1929年にニューヨーク近代美術館が導入したとされる。

***7 上小阿仁プロジェクト** 新潟県の越後妻有トリエンナーレの飛び地開催として始まった秋田県上小阿仁村で行われた地域の芸術祭。2012年から2015年まで開催された。2016年に降は「かみこあにプロジェクト」と改題して継続されている。

***8 番楽** 東北地方に伝わる山伏神楽の一種。北日本の日本海側で主に「番楽」と呼ばれている。

***9 池田修三** 秋田県象潟町（現在のにかほ市象潟）生まれの版画家。（1992-2004）

主に子供をテーマとした多色刷り版画の制作を行った。原画制作、版木の彫り、刷りまでの全ての工程を自分自身で行っていた。

***10 越後妻有／直島** 新潟県越後妻有地域で行われている「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」と瀬戸内海の島々を舞台に行われている「瀬戸内国際芸術祭」のこと。香川県にある直島は瀬戸内国際芸術祭の会場でもあり複数の美術館を要する。越後妻有トリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭は日本の地域系芸術祭の先駆的例であり成功例として取り上げられることが多い。

A-Lab Workshop

作品探検ツアー

小学校6年生までの子どもを対象に、山本太郎さんと一緒に、“展覧会”を探検するツアーを開催しました。

講 師 山本太郎さん(出品作家)

日 時 平成30年10月8日(月)祝

午後2時から3時30分

場 所 あまらぶアートラボ(A-Lab room2)

参加者数 9名



時代とあそびたびするつる

A-Lab Exhibition Vol.15

山本太郎展

伝統的な日本画の技法で、現代の景観や風俗を描く「ニッポン画」を提唱し、制作してきた山本太郎。ここ数年は、教員として赴任した秋田や出身地の熊本、学生時代を過ごした現在の活動拠点である京都など、日本各地を転々としながら、それぞれの地域に根付いたプロジェクトを展開しています。今回は、山本がこれまで手がけてきたうちの代表的なプロジェクトに注目し、各展示スペースを構成しています。

Project 1 アケオメリクリ

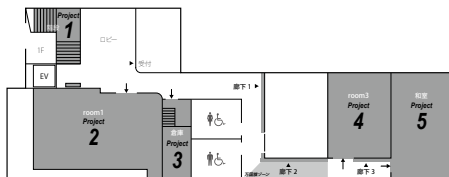
2017 年 12 月から 2018 年 1 月にかけて、秋田公立英術大学サテライトギャラリー・ビヨンプォイントを、クリスマスとお正月の兼取である紅白の空間に変えたプロジェクト、アケオメリクリ。その建築のデザインには、足利光庵の墨画『紅白梅図屏風』を現代風にリミックスした山本の作品『清涼飲料水紋図』が用いられました。今回、そのプロジェクトを A-Lab 仕様に作り変え展示します。また、ビヨンプォイントでは展覽会館附設クリスマスパーティーを開催しました。作品を舞台に秋田舞妓が舞うなど、その時の模様を映像で紹介します。

アケオメリクリ 山本太郎の紅白の階段	カットイングレート / サイズ可変 / 2018
《清涼飲料水紋図 Red & White》	紙本金地着色 / 53×33.3cm / 2018
《清涼飲料水紋図 Strawberry Moca》	紙本金地着色 / 33.3×34.3cm / 2018

Project 2 熊本ものがたりの屏風

2016 年の熊本地震で被災した装表具材店から、捨てられることになっていた屏風などを山本が譲り受けて修復し、そこに公衆で集められた熊本に住む人々の思い出の品々を描いたプロジェクトです。

《熊本ものがたりの屏風 みんなの思い出展覧会風景》	紙本金地着色 / 各 15.5×90cm、二曲一巻、三折 / 2017
《熊本ものがたりの屏風 いと小さきもの小屏風》	紙本金地着色 / 36.5×95cm、二曲一巻 / 2017
《熊本ものがたりの屏風 女性のいのちの金目屏風》	紙本金地着色 / 36.5×186cm、二曲一巻 / 2017
《熊ヶ崎園屏風 櫻木ノル本》	紙本金地着色 / 152.2×365.2cm、六曲一巻 / 2016



尼崎城プロジェクト関連企画

Project 3 コラボレーションプロジェクト

山本と手塚本郷和紙本出版社の芸術家、ゲームメーカーの任天堂、男のさものえいたろう屋や陶芸家、吉川真一氏とコラボレーションして生み出した本展覧や浴衣、茶碗などを展示します。

《山本太郎国家 芸術家制作 マリオ & ルイージ図本展覧》	©Nintendo 山本太郎 2015
本展覧 / 66×30cm / 縦寸 / 2015	
《アイコ帳造り》	辻海 / 男性用浴衣 / 2017
《ワラ版 尼崎の松葉餅》	13.2×6.3cm / 2019 / 個人展
《ワラ版 富士に新幹線図本展覧》	13.2×8.8cm / 2014 / 個人展

万歳旗ゾーン

《つきのわくま(ワラ旗)》	紙本金地着色 / 33.3×53cm / 2017
《万歳旗 横断》	紙本金地着色 / 24.2×33.3cm / 2011

Project 4 平成版八木沢番茶帳幕 (かみこあにプロジェクト 2017)

マダガの室として知られる秋田県上村に、ここで 2012 年から始まった芸術家 (KAMIKOANI プロジェクト) 2016 年より「かみこあにプロジェクト」と題し、に初年時から参加している山本が、2017 年に県庁所在地である八木沢地区に伝わる郷土芸能「八木沢番茶」のための新しい帳幕を制作しました。それまで使われていた帳と新しい帳、そして新しい帳のために描かれた原画を展示します。

《八木沢番茶帳幕》	水染 / 染色 / およそ 530×190cm / 制作年不明
《平成版八木沢番茶帳幕》	上村に村八木沢地区公民館展覧
	約 2.5m の幅にプリント / およそ 530×190cm / 2017
《平成版八木沢番茶帳幕原画》	上村に村八木沢地区公民館展覧
	紙本金地着色 / 72.7×50cm / 2017

Project 5 羽衣(レレン) (KAMIKOANI プロジェクト秋田 2014)

伝説の「羽衣」のクライマックスで、美女が自分の羽衣を返してもいい美人の国に浮遊しながら帰るシーンを風船で表現した「羽衣(レレン)」屏風。その屏風のまわりで、たくさんの本物の風船を置いています。観客のみさんぽ、その中に入って風船で遊んだり、そこから風船をひとつだけ持ち帰ることが出来ます。その代わりとして、その場で新しい風船を作った補充していただくなど、作品と観客が双方向的に関わることを目指したプロジェクトです。

《羽衣(レレン)》	紙本金地着色 / 各 172×189cm、二曲一巻 / 2014
-----------	----------------------------------

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.17
Exhibition vol.15「時代とあそぶ たびする つくる」山本太郎展

2019（平成31年）12月 初版第1刷発行

制作・編集・発行 尼崎市 シティプロモーション事業担当
展示撮影 表恒匡
